（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	小田　直史
論文題目	ベンヤミンの見たアレゴリカ―・ボードレールの相貌		

（論文内容の要旨）

本博士学位申請論文は、ドイツの思想家・文芸批評家ヴァルター・ベンヤミンが生涯にわたって関心を抱きつづけていたフランスの詩人シャルル・ボードレールについて論じたものであり、ベンヤミンがボードレールを「アレゴリカ―」と規定する真意がどこにあるのかを明らかにしようとしたものである。それは、ベンヤミンが１７世紀のバロック悲劇についての論考で展開した「アレゴリー」概念をあらためて現代的な観点から洗い直すとともに、ロマン主義者、象徴主義者として特徴づけられるボードレールの詩の規定に根底的な変更を迫るものともなっており、ベンヤミン研究とボードレール研究の双方にまたがり、これらをつなぐものと総括できる。

本論文は４つの章と終章よりなる。

第１章「ボードレールの「芸術」」ではまず、ボードレールがコンスタンタン・ギースを論じた評論（「現代生活の画家」）で展開した「現代性（モデルニテ）」の概念をもとに、ボードレールの「芸術」観について論じられる。それは、現代の風俗・モードのうちに、かつて存在した「英雄性」（理想）をとらえようとする「芸術」観であり、ある意味で古典的ともいえる陳腐な「芸術」観でもある。しかし、そうした芸術論ではなく、ボードレールの実際の詩作品（『悪の華』）そのものに目を向けると、これとは反対に、この「英雄性」なるものが無残に崩れ、理想が瓦解してとめどない憂愁へと姿を変えていることが明瞭になると――ベンヤミンのボードレール論をにらみつつ――申請者は論じる。こうした観点から、本章は、ボードレールのダンディズム、ハシッシュ陶酔、進歩主義批判、E・A・ポオへの傾倒、ド・メーストルの原罪観への傾斜、さらにはヴァーグナーへの心酔などについて具体的に目を向けながら、ボードレールが、理想の崩壊したこの近代の開始期において、ベンヤミンのいう「アレゴリカー」の根底に脈打つメランコリ―の感情のうちに自らの「芸術」観を築いていったさまをあぶり出す。

第２章「ボードレールの「ロマンティスム」」では、第１章の内容と深くかかわりつつ、フランス・ロマンティスムの末裔とも目されるボードレールが、じつはロマンティスムの本質的な批判者であったことが論じられる。たしかに青年時代のボードレールは、セナンクールやシャトーブリアンなどのロマン派詩人たちに代表される、大革命によって失なわれたクラス・アイデンティティを奪回しようとする彼らの試みに自らも賛同し、未知への渇望に心躍らされてはいた。しかし、彼は、自らの「癒しえぬメランコリー」に引きずられたまま、彼らの「自然」憧憬には背を向けていたし、またロマンティスムの大御所ユゴーの進歩観や時代礼賛的姿勢には徹底した批判を浴びせかけてもいた。本章は、そうしたボードレールの反ロマンティスム的姿勢を多面的に描きつつ、彼自身の「ロマンティスム」が、スタール夫人の『ドイツ論』によってフランスに定着したドイツ的精神性（メランコリー）に深く影響を受けたものであることを論じる。ボードレールが、やがてはナポレオン崇拝や進歩礼賛と手を結びあうことになるロマンティスムとは根本的に無縁であることを明らかにするのが本章の狙いとなっている。

第３章「ボードレールの「アレゴリー」」は、メランコリーを養分とするボードレールの思考ならびに詩作が、ベンヤミンのバロック論（『ドイツ悲劇の根源』）で掴み出された独特のアレゴリー概念と軌を一にするものであること示すために、いったん鉾先を向け変えて、ベンヤミンのアレゴリー論に深く分け入ってゆく。ベンヤミンのいうア

レゴリーとは、この世に理想も意味もなくなってしまったメランコリーのなかで、この世のすべての事物・事象に好き勝手な意味づけをほどこし、退屈な世界を撹乱させるがごとき思考法ないし言語使用のことをいう。それは、かつてドイツ１７世紀バロックの特殊な宗教的、歴史的な事情が大々的に呼び寄せたもので、ベンヤミンは、「自然史」「悲しみ」「生の倦怠」「アクロバット的言語使用」「悪魔論」「土星論」等々とめまぐるしく視点を変えながら、これを、メランコリカ―の虚しい気晴らしとして規定するとともに、そこに「復活のアレゴリー」というかたちで反転的な救いを見出そうとした。本章は、こうしたベンヤミンのプロセスを最後まで追いつつ、その一つ一つがボードレールの詩の実践に重なっていることを証拠づける。バロックの世界を席巻したこうしたアレゴリー思考が、近代のとば口にいるボードレールのうちに、強度を増したかたちで入り込んでいるのを論証するのが本章の眼目となっている。

第４章「ボードレールの弁証法的思考」では、ベンヤミンのこの「復活のアレゴリー」が、近代のアレゴリカ―・ボードレールのうちにどのようなかたちで現れ出ているのかに焦点があてられる。「復活のアレゴリー」とは、悲しみと混乱の極みでの反転への意志、未定の「ユートピア」への反転の意志と言い換えることができる。本章は、これをベンヤミンの弁証法的（反転的）な思考（「静止状態の弁証法」）と二重映しにしながら、産業資本主義社会のなかで理想が消滅してしまった出口なき近代に佇むボードレールに、いかなるをかたちで「ユートピア」への意志が読み取れるのかを具体的に論じてゆく。商品社会のファンタスマゴリ―と未定の「ユートピア」との狭間を遊歩する「フラヌール」としてのボードレール、憂鬱なパリを描きながらそのメランコリーの極限に未定のかたちで「ユートピア」を浮上させている狂気の銅版画家シャルル・メリヨンに魅入られるボードレール、そうした具体例を出しながら、本章は、ショックと「想起」における現在と過去のオーヴァーラップの技法（アレゴリー技法）を通して近代に未定の「ユートピア」を浮かび上がらせようとするボードレールの「芸術」の本質を描き出してゆく。

終章は、結論として、気晴らし（夢・ファンタスマゴリ―）とそこからの目覚め（「ユートピア」）が同居したものとしてのボードレールの姿を鮮明に打ち出すことによって、ボードレールの根底に主観の消滅への意志が息づいていること、その意味で、ボードレールがまさにバロックの「復活のアレゴリ―」を体現していることが論じられる。本論は、その点にベンヤミンがボードレールを「アレゴリカ―」として規定したその真意とアクチュアリティがあることを確認して論を終えている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本博士学位申請論文は、近代詩の確立者、象徴主義の先駆者といわれるボードレールの思考と詩作の本質がどこにあるのかを、彼に対するベンヤミンの見方を検討することを通して、問い直すものである。ベンヤミンがボードレールを「アレゴリカ―」と呼んだ真意はどこにあるのか、本論文は、これを問うことによって、ボードレールの文学史的な位置づけを揺り動かすだけでなく、鬱蒼たるドイツ十七世紀バロック文学からベンヤミンが摑み出してきたアレゴリーのもつアクチュアリティを大きくアピールするものともなっている。本論文の博士論文としての評価すべき点は、以下の４つにまとめることができる。

１）本論文は、ボードレールの思考と詩作の奥深くにメランコリーが深く根を下ろしていることを、彼のダンディズム、進歩主義批判、ド・メーストル的原罪観、ハシッシュ陶酔、ポオやヴァグナーへの心酔、等々を具体的に検証することによって明らかにしており、そのうえで、ボードレールのこのメランコリーが何に発しているのかを問題にし、そこにフランス流のロマンティスムの射程ではとらえきれない「近代」のありようを見出している。「近代」との最初の格闘者としてのメランコリカ―・ボードレールの相貌を明瞭に浮かび上がらせたこと、その点で本論文は、ボードレール研究においてこれまでとは異なる重要な一石を投じるものとなっている。

２）本論文は、理想を失いメランコリーに閉ざされながら近代と対峙するボードレールに、独特の思考法ないし表現技法としてのバロック的アレゴリーが出現してくることを指摘し、その経緯をベンヤミンのバロック論での具体的叙述と逐一照らし合わせながら明らかにした。その点で本論は、ボードレール研究とベンヤミン研究の両分野にとって大きな意義をもつものであると言ってよい。とりわけ、ベンヤミンがバロック論の最後で展開した難解な「復活のアレゴリー」の意味を自分なりに深く解釈し、ボードレールの詩作の背後にもこれと同じ未定のユートピアへの志向が息づいていることを論証した点は、特筆に価する。

３）以上の点にもとづいて、本論文は、ボードレールの思考法のうちに、ベンヤミンの「静止状態の弁証法」と同じ反転の弁証法、テーゼとアンチテーゼを緊張した静止状態のうちに並べ置き、そこからの反転として未定のジュンテーゼを浮上させようとする思考法が蠢いているのを明らかにした。ボードレールは、現実にのめりこみながら、そこに同時に現実の死滅の姿を見、この二つの緊張のなかで新たな現実を呼び寄せようとする思考のうちに自らの詩作を実践していた。本論が、これを、近代の商品社会のかもすファンタスマゴリ―と理想（未定のユートピア）のあいだをさまようボードレールの「フラヌール」の姿のうちに具体的に描き出している点には見るべきものがある。また、そうしたボードレールの姿を、彼が心酔した銅版画家メリヨンに重ねている点も大いに評価できる。現実（現在）と過去（死のうちにひそむ未定のユートピア）のオーヴァーラップを特徴とするメリヨンとボードレール（ないしベンヤミン）のつながりを掘り下げた研究は、これまで少ない。その意味でもこのメリヨンとの関連は、今後のボードレール研究、ベンヤミン研究にとって重要な意味をもつことは確実である。

４）現在のわれわれの時代は、理想を打ち立てて前進することが不可能となった時代と規定することができるだろうが、本論は、これに対してこの不可能性の時代を越え出てゆく道を示唆しているという点で評価できる。そうした意味で、本論が目指しているのは、メランコリーに閉ざされたアレゴリー的気晴らし（商品世界のファンタスマゴリ―と夢）にどっぷり浸かるなかで、その虚無のうちに反転的に「目覚め」を

もぎとってくることだと総括できるだろう。ボードレール、ベンヤミンの研究のなかで、つねにその点をにらんで論を組み立てている本論の姿勢は、われわれの現代思想にとって少なからぬ意義をもつことになると評価できる。

本論文は、言葉遣い、表現法にやや不鮮明で曖昧なところも見受けられるが、すぐれた外国語読解能力を駆使して、ボードレールの詩をはじめ評論、日記、書簡にいたるまで綿密に原典にあたり、またベンヤミンの難解なバロック論やボードレール論をきちんと読みこなし消化したうえで、以上の４点について価値ある議論を展開し、すぐれた成果をあげている。今後の西洋の文学・思想の研究にとって、メランコリー研究ならびにアレゴリー研究の視点から、新たな道を示唆するものとなることが期待できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２７年１月２３日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　　平成　　年　　月　　日以降